

令和7年度(第76回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|----|-------|---|
| 演劇 | 齋藤 雅文 | 劇団新派(しんぱ)の座付(ざつ)き作者から芸歴をスタートし、歌舞伎から現代劇まで幅広く手掛ける。同名小説が原作の「木挽町(こびきちょう)のあだ討ち」では脚本・演出として原作の味わいを損なわずに筋を通し、優れた群像劇に仕立てあげた。長く商業演劇に身を置く作者ならではの手腕が遺憾なく発揮された。小説「花と龍」の脚本では、原作の前半部分を換骨奪胎(かんこつだつたい)し、人物が生き生きと動く作品に作り上げた。大劇場演劇の貴重な書き手として実績を積み、今後の活躍も期待される。 |
| 演劇 | 味方 玄 | 平成8年に始めた自主公演「テアトル・ノウ」が記念の50回目を迎え、「三輪(みわ)」を、京都の片山家が創始した重い小書(こがき)「白式神神楽(はくしきかみかぐら)」で上演した。白一色をまとう三輪明神(みわみょうじん)の姿は、品格と清浄な気に満ちていた。初期の頃はホールや野外などで自由な演出に挑んだ自主公演であったが、近年は内面と自然な演技に重点を置く。他に「江口」など、本年の舞台はいずれも充実し、鍛えた技量と深い曲解釈とが高いレベルで交差した。講座、執筆などを通して能の魅力を広く発信してきた功績も大きい。 |
| 映画 | 吉田 大八 | 「敵」はコロナ禍の自粛期間中、吉田大八氏が筒井康隆氏の同名小説を自ら脚本化し、後に映画化した作品である。 外から来る何かに怯(おび)えるアイデンティティーのバルネラビリティ「vulnerability / 脆弱性(ぜいじやくせい)」は今や国境を超え、現代人に突き付けられた命題であるが、吉田氏はモノクロームの映像で、極めて鋭く、容赦なく掘り下げた。カタルシスを排し、不安や虚無を残す終わり方がこの問題を簡単に解決できないものとして私たちに突き付けてくる。長編デビュー作以来、人が自身の倫理観、道徳観で揺れる瞬間を、批評性を持って描いてきた到達点として高く評価する。 |
| 映画 | 李 相日 | 「国宝」は、歴代興行収入ランキングで22年ぶりに記録を塗り替え、邦画実写No.1作品となった。令和8年2月には200億を突破。現在もなお興行成績を更新中である。そうした数字の面だけではなく、女形としての才能を見いだされ歌舞伎の世界に入った主人公が、その家の御曹司と切磋琢磨(せつさたくま)の末、芸道に青春を捧げる吉田修一氏の原作を、氏が見事に映像化した。「フラガール」「悪人」と、着実にキャリアを積み重ねてきた氏の手腕は、大臣賞に相応(ふさわ)しい成果である。 |
| 音楽 | 遠藤 千晶 | 全曲独奏曲による本演奏会は、選曲と楽器を隔々まで鳴り響かせる優れた演奏によって、箏(こと)という楽器の無限の可能性を示した。各作品を丁寧に把握し、その上での端正な演奏によって、作曲された時代も性格も全く異なる作品の魅力を引き出すことに成功している。特に終曲の「手事(てごと)」では、和洋の各要素をバランスよく表現し、そこに込められた立体的な音の構造を際立たせたことで、作曲者の意図に迫るものであった。 |
| 音楽 | 山田 和樹 | 令和7年の山田和樹氏の活動は、その見識と主張、音楽的内容の充実において刮目(かつもく)すべきものであった。パーミングを中心にして海外での活動を主軸にしながらも、国内においても氏しかなし得ないプログラミングとその演奏内容の充実を示した。大阪の4つのオーケストラと、盟友である東京混声合唱団と展開したメンデルスゾーン4回の演奏会の充実はその典型であり、日本フィルハーモニー交響楽団定期を含む11月末まで、その快進撃は続いた。 |
| 舞踊 | 宮川 新大 | 宮川新大氏は、所属する東京バレエ団で主要な役柄の多くを踊り、ゆるぎない技術とそこに立脚する気品ある物腰で注目されてきた。令和7年は古典名作「眠れる森の美女」の王子役でさらにその美点に磨きがかかり、またモーリス・ベジャール振付の「ザ・カブキ」では、削ぎ落とした感情の奥に静かな覚悟を宿した新世代のヒーローを造形。「ベジャールの「くるみ割り人形」」でも闊達(かつたつ)でコミカルな猫役で新境地を開き、幅広い作品に対応する柔軟な表現力を示した。 |

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|--------|---------|---|
| 舞踊 | 森山 開次 | 創造性に富んだ作品で知られるダンサー・振付家。東京2020パラリンピック開会式に関わったスタッフを中心に、新たなメンバーも加わって制作された舞台「TRAIN TRAIN TRAIN」では演出・振付を担当。不思議なSLに乗った詩人の旅を、様々なパフォーマーの声や身体表現に、演奏、映像、テキストも駆使し、視覚だけ、聴覚だけでも楽しめる舞台に仕上げた。多様な表現を統合する演出手腕を発揮するとともに変幻自在なソロも披露。振付、踊りの両面で高いレベルにあることを印象付けた。 |
| 文学 | いしい しんじ | 釣りをし、料理をし、音楽を聴き、土地のことばで語り合う。愛用の楽器を奏で、歴史に翻弄されながら生のバトンを次世代に手渡す。いしいしんじ氏は大長篇(だいちょうへん)「チェロ湖」で、デジタル効率化に覆われる前の人間の営みを、五感で受けとり創りだすものへと再生させた。物語性では「古事記(こじき)」に、自然描写では「新古今和歌集(しんこきんわかしゅう)」にまでさかのぼる日本語による芸術表現の根を継いで、あらたな葉を繁らせ、見たことのない花を咲かせることに成功した。 |
| 文学 | 堀江 敏幸 | 堀江敏幸氏の「二月のつぎに七月が」は大衆食堂を舞台にした長編小説で、食堂関係者や常連客の交流をユーモアや哀感をまじえて繊細かつやわらかな筆致で描き出す。風味や調理法に限らず、嗜好(しこう)、食べ方の癖、消化の悩みなど「食」の話題をふんだんに盛り込む一方、氏ならではの話法の効果もあって、人々の声や思いが網の目のように連鎖し、言葉の脈(にぎ)わいが生み出される。心の傷や悔恨、不安、希望など生の有り様を多面的に慈愛とともにまとめあげる作家の卓越した技量が高く評価された。 |
| 美術A | 安藤 榮作 | 安藤榮作氏は、東日本大震災と福島第一原発事故を経て制作拠点を奈良に移し、生と死を根源的テーマとする木彫(もくちょう)表現を展開させてきた。地元の木材を用い、斧(おの)による独特な技法で彫刻は生み出される。令和7年初秋、奈良県立美術館で開催された個展「約束の船」では、彫刻と平面を融合した大規模なインスタレーションを発表。深い精神性を湛(た)えた作品群が美術館全体を通して、現代を生きる我々に魂の在り処(ありか)を鋭く問い掛けた。その成果は、日本の現代彫刻に新たな可能性をもたらすものとして高く評価された。 |
| 美術A | 岡崎 乾二郎 | 造形芸術と批評を通じて世界の認識を洞察してきた岡崎乾二郎氏。令和3年に脳梗塞を患い、造形作家としての「転回」を迎えた。東京都現代美術館での「岡崎乾二郎 而今而後 ジコンジゴ Time Unfolding Here」展では、転回以前の代表作を網羅しつつ、転回後の新作群を発表した。新作では、身体性を強く反映する粘土の仕事が印象深く、それらを3Dスキャナーで拡大した彫刻群は、巨大さと解像度の高い細部が両立した稀有(けう)な存在感に溢(あふ)れていた。新境地での一つの達成を讃(た)えつつ、更なる高みにも期待したい。 |
| 美術B | 深澤 直人 | 深澤直人氏は、人間の行動に対する観察を丹念に行いながら、文化的脈絡や感覚的要素をも内包する環境をすくいと、とらえにくい要素も統合する独自のデザイン活動を展開している。デザインの本質的意義を探りながら地歩を築いてきた活動は国際的にも注目を集め、令和7年度には、主要作品を通してその創造哲学を俯瞰(ふかん)できる展覧会が開催された。哲学者カントの概念をタイトルに掲げた同展では深い思索に裏打ちされた氏の姿勢が浮かび上がり、現代デザインに対する重要な示唆を改めて提示する機会ともなった。以上の成果と、継続されている真摯な活動の功績を併せ、高く評価する。 |
| メディア芸術 | 鶴巻 和哉 | 広い世代にファンを持つ「機動戦士ガンダム」の世界に、鶴巻和哉氏は「架空戦記」という切り口を持ち込み新風を吹き込んだ。原典からの「本歌取り(ほんかどり)」の妙と氏らしい世間に馴染(なじ)めない若者のドラマの二層構造。そこに華のある映像が融合した本作は、氏の新たな代表作である。劇場で先行上映されたTVシリーズ序盤は興行収入36億円超を記録。TV放送は、深夜0時過ぎの放送枠にもかかわらず、毎週SNS上で大きな反響を呼んだ。2020年代を代表する作品を送り出した業績を讃(た)えたい。 |

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|--------|--------|--|
| メディア芸術 | 槇村 さとる | 画業 52 周年。今なお少女漫画の第一線で活躍する槇村氏。流行や価値観がめまぐるしく変わる中、時代に沿った等身大の女性を描き続けてきた。氏の描くヒロインたちは強く楽しくおしゃれに人生を開拓する。彼女らの姿は日本の女性たちの背中を押し、意識を押し上げてきた。現在「ココハナ」にて連載中の「ダンシング・ゼネレーション senior」では更年期と社交ダンスをテーマに人生の黄昏(たそがれ)における豊かな生き方について描き、たくさんの読者の人生を豊かにしている。 |
| 放送 | 柴田 岳志 | 「八月の声を運ぶ男」は、千人以上の被爆者の声を録音した放送記者を主人公に、一人の被爆者の向こうに無数の被爆者の存在を浮かび上がらせる秀逸な作品。ほぼ会話だけで構成される難易度の高い物語が一瞬も目を離せない仕上がりになったのは、柴田岳志氏の熟練かつ卓抜した演出手腕によるものである。これまで数々の秀作を送り出してきた実績も踏まえ、新しい技術・手法を貪欲に吸収しながら、繊細かつ骨太なドラマを世に出し続ける演出家としての姿勢を高く評価する。 |
| 放送 | 四元 良隆 | 息長く、へこたれず現実と向き合う意志が四元良隆氏の作品から迫ってくる。ディレクターとして20年にわたり難病の少年とその家族を見つめた「負けテタマルカ!!!」は、亡くなった我が子から、父と母が、生きることの希望を手渡されていく稀有(けう)な物語となった。また、プロデューサーを務めた「警察官の告白」は、鹿児島県警の不祥事隠蔽疑惑に丹念な取材で迫った。ある人物のインタビューに4か月をかけ、60本を越えるニュースなどを放送してドキュメンタリーにつなげた。その仕事は「故郷のために」テレビは何ができるのかという問いかけに貫かれている。 |
| 大衆芸能 | 大貫 妙子 | シュガーベイブの「SONGS」がリリースされてから 50 年。ソロ・アルバム「サンシャワー」「ミニヨン」といった初期ソロ作品が、海外で再評価され、世界的なシティポップ・ブームの立役者の一人である大貫妙子氏は、デビュー50周年を迎えた。令和5年から「ピーターと仲間たち」という発表当時のオリジナル音源に忠実なサウンドや、シーケンサー、シンセサイザーを使用した楽曲を中心としたコンサートもスタートさせ、活発に音楽活動を展開。日本のポップス界を牽引(けんいん)しつづけている。 |
| 大衆芸能 | 清水 ミチコ | ラジオ番組へのネタ投稿をきっかけに才能を開花させ、軽快なトーク、得意なピアノを活(い)かした弾き語りものまね、さらには芸能人や文化人など人を選ばず特徴をデフォルメした顔まねと、テレビ・ラジオでのタレント活動とともに、芸域を拡(ひろ)げてきた。平成25年に始まった日本武道館ライブは、音楽的にもクオリティーの高い内容で、全国ツアーとともに「音楽とお笑いの融合」は大人のエンターテインメントとして唯一無二の芸を確立させた。 |
| 芸術振興 | 小田井 真美 | さっぽろ天神山アートスタジオのAIRディレクターとして、長年にわたり日本におけるアーティスト・イン・レジデンスの発展と定着を牽引(けんいん)してきた第一人者である。創作現場に寄り添う運営を通じて、地域社会・行政・国際ネットワークを結ぶ基盤を築き、草の根の国際相互理解を促進してきた。さらにAIRネットワークジャパン等、同業者ネットワークの場での対話を通じ、各地の取組の要となる役割を果たしつつ、日本のAIRの信頼性を国際的に高めた功績は大きい。 |
| 芸術振興 | 福井 健策 | 福井健策氏は、著作権法を専門とする弁護士として、幅広い文化芸術分野の基盤整備に長年貢献してきた。とりわけ舞台芸術や映像作品の記録保存を可能にする権利処理の体系化を主導し、作品のアーカイブ化を大きく前進させた点は高く評価される。令和7年は特に、「エンタテインメント法実務 第2版」(編著)の出版や現場での知識普及活動を通じ、将来にわたる文化資源の継承と活用に不可欠な基礎を築いた。さらに政策形成や生成AIと著作権をめぐる議論にも尽力し、文化芸術支援の発展に寄与した。 |

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|----|------|---|
| 評論 | 大出 敦 | <p>ポール・クローデル。近代フランスの大文学者。外交官でもあった。1920年代には駐日大使を務めてもいる。はて、熱烈なカトリック信者のクローデルと、八百万(やおよろず)の神々の日本はどこまで切り結べたのか。難問だった。が、ついに魅力的突破口が示された。大出敦氏の細密な研究の上に大胆な議論が展開される。クローデルが惹(ひ)かれたのは平田篤胤(ひらたあつたね)の国学や能や水墨画。不可知の何かの存在を示唆したいものばかりだ。一方、キリスト教の神学とは語り得ぬ神の存在を示唆しようとする。余白か黒塗りのある形而上学だ。この交差からクローデルの文学は読み直されるであろう。日本発の偉大な成果である。</p> |
| 評論 | 松隈 洋 | <p>本書は20世紀の日本を代表する建築家・前川國男(まえかわくにょ)に関する非常に充実したモノグラフである。松隈洋氏は前川の戦前の仕事を論じた前著「建築の前夜 前川國男論」の問題意識を継承し、本書で前川の戦後の重要な仕事を余すことなく論じた。多くの作品を実見し、膨大な記録を参照して書かれた本書の根底には、晩年の前川に師事した氏ならではの深い理解と共感があり、また同時に前川國男という一人の人間が生きた時代の詳細な記録ともなっている。</p> |

令和7年度(第76回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|----|--------------|---|
| 演劇 | 尾上 右近 | 役者絵から抜け出たような古風な容姿と、もう一つの顔、清元(きよもと)の唄方(うたかた)「栄寿太夫(えいじゅだゆう)」として鍛えた声調(せいちょう)、そして規矩(きく)正しい踊りの才幹(さいかん)が存分に花開いた令和7年だった。「春興鏡獅子(しゅんききょうかがみじし)の可憐(かれん)な小姓弥生(こしょうやよい)と荒ぶる獅子。どこか童話の主人公のような懐かしさのある「義経千本桜(よしつねせんぼんざくら)の狐忠信(きつねただのぶ)、そして自身の勉強会で演じた「盲目の弟」角蔵(かくぞう)は、いずれも曾祖父で六代目の尾上菊五郎(おのえきくごろう)が手掛けたもの。伝統を現代へという気概、新作への意欲など、次代の歌舞伎を牽引(けんいん)する一人だ。 |
| 演劇 | 望海 風斗 | トップスターとして活躍した宝塚歌劇団を退団して5年。数々の話題作に主演し、舞台のトップ女優の地位を確立しつつある。「マスタークラス」では伝説的なオペラ歌手マリア・カラスを彷彿(ほうふつ)させる圧倒的な存在感で魅了した。「エリザベート」では16歳のお転婆少女から悲劇的な死を迎える晩年まで皇后の葛藤と孤独を優れた演技力と卓越した歌唱力で丁寧に演じ、初演から25年の超人気作のヒロイン像に確かな足跡を残した。 |
| 映画 | 石川 慶 | 石川慶氏の映画は、映像の力と観客を信じている。引いた風景の中での芝居、テレビに映るニュース、棚に置かれた花、食卓にこぼれる陽光。それら全てをもって大いなる生を語る。一瞬たりとも目を離せない。映画「遠い山なみの光」では、様々な光を生活空間に反射させ、小説家カズオ・イシグロの記憶に基づき、原爆復興期の1950年代の長崎と1980年代の英国を描いた。女性たちの記憶のリフレクションは、愛おしくも当たり前ではない日常の概念を際立たせた。 |
| 映画 | 広瀬 すず | 広瀬すず氏は、13年ほどのキャリアを持ち、既に国民的な俳優と言える確かな地歩を築いている。主演の2作「ゆきてかへらぬ」「遠い山なみの光」を含む出演作では、奔放な女優から貞淑な妻までそれぞれに異なる難役を実に表現豊かに演じた。これまでに発揮してきた瑞々(みずみず)しさや自然体の魅力から一層飛躍し、その演技はより成熟と深みを増して、スクリーンを彩っている。氏にとって今後のさらなる活躍が期待される充実した年となった。 |
| 音楽 | クアルテット・インテグラ | 西洋音楽の基本形態ともいべき弦楽四重奏。これに継続的に取り組み目覚ましい成果を上げている若い世代が、近年我が国で多くみられる。中でもクアルテット・インテグラは、アンサンブルの緊密さ、解釈の清新さと大胆さにおいて一頭地を抜いている。そのことを、難度の高いバルトーク、ヤナーチェク、ベルクの作品を合わせた一夜で、まざまざと見せつけた。結成10年を迎えた令和7年は、ベートーヴェン・ツィクルスをも開始し、知的に練られた演奏を聴かせた。日本発の弦楽四重奏団として、今後、必ずや世界の第一線で活躍するであろう。 |
| 音楽 | 中井 智弥 | 中井智弥氏の第12回リサイタルでは、箏(こと)・三絃(さんげん)・二十五絃箏(にじゅうごげんそう)の演奏家および作曲家として、古典を意識しつつ新生面を切り開く多彩な活動の成果が示された。古典曲「秋風の曲」の演奏には確かな技量のなかに瑞々(みずみず)しさがあり、歌舞伎「刀剣乱舞(とうけんらんぶ) 東鑑雪魔縁(あずまかがみゆきのみだれ)」のテーマ曲をはじめ、次々に披露された自作曲の音楽性と演奏にも輝きがあった。ART歌舞伎の音楽や多様なジャンルの演奏家との共演など、多方面に躍進し、観客を魅了する彼の活動は、「時をこえて」というリサイタルの副題に象徴されるように、未来につながる新しい風として高く評価できる。 |
| 舞踊 | 岩井 優花 | 令和6年末にプリンシパルへ昇進し、同7年においては古典全幕やガラ公演において八面六臂(はちめんろっぴ)の活躍を見せた。「白鳥の湖」ではオデット/オディール、「ドン・キホーテ」では快活な町娘キトリと夢幻的な森の女王と、性格の異なる大役をいずれも見事に務め上げた。高度な技術と豊かな音楽性を融合させ、役に命を吹き込む表現力は、ドラマティックな熊川版バレエの表現者として大きな成果を挙げ、今後も更なる飛躍が期待される。 |

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|-----|-------|---|
| 舞踊 | 花柳 壽輔 | 花柳流の当代家元として、三日間にわたる大規模な先代・先々代の追善舞踊会を主宰し、流派の大切な演目の数々に取り組み、旺盛な実践力を示した。とりわけ、難曲である初代花柳壽輔振付「茨木(いばらき)」に30代という若さで挑み、今の年齢に相応(ふさわ)しい調和でまとめあげたのが出色であった。また二代目花柳壽輔振付「夢殿(ゆめどの)」ではその精髓を確かに継承し、細部まで丁寧に表現していた。これらの成果は、次代の日本舞踊界を牽引(けんいん)する将来性を十分に示すものであり、今後一層の期待が寄せられる。 |
| 文学 | 朝比奈 秋 | 「受け手のいない祈り」は、緊急外来病棟を舞台に、過酷な医療現場の現実を克明に描いた作品である。瀕死(ひんし)の患者と対峙(たいじ)する緊迫した描写に加え、心身共に疲弊する医療従事者たちの救いのない絶望を冷徹な筆致で描き切る。「命を救う者が、自らの命を失う」という現代日本の矛盾を鋭く抉(えぐ)り出す、その圧倒的なリアリズムと筆力は、芸術選奨新人賞にふさわしい |
| 文学 | 大塚 凱 | 大塚凱句集「或」は、現代に生きる若者の実感をたしかに捉えている。「着ぶくれて似てゐる午後をくりかへす」。厚着をして感覚が鈍っているせいもあって、驚きに満ちた新鮮な午後は永遠に來ないかのように感じられている。静謐(せいひつ)ではあるが、切実でひりひりする「いま」が書きとめられている。「ビール呷(あお)るザハ案でない方の未来」。批判的視線もしたたか。連作を連ねた編集の句集ではあったが、一句一句それぞれの独立性は高い。 |
| 美術A | 青木 千絵 | 青木千絵氏は、工芸と彫刻を横断する独自の人体表現を展開している。令和7年秋に岐阜現代美術館で開催された個展「闇へ研ぐ」では、研ぎによって生まれる漆黒の鏡面をもつ作品群が、人体の普遍的な美と漆表現に内在する膨大な時間性を鮮烈に立ち上げた。その造形は官能性を持ち、観(み)る者自身を作品へと投影させ、感覚を深く揺さぶる。効率や即時性が支配する現代において、これからの手仕事の意味と人間表現の新たな可能性を示した。 |
| 美術A | 玉山 拓郎 | 玉山拓郎氏は、既存の建物や身近なものに光や映像、音を組み合わせ、空間全体を異化するインスタレーションを手掛けてきた。豊田市美術館の「玉山拓郎：FLOOR」展は、内と外の境界やスケール感を揺さぶり、見知った空間を見知らぬ空間へと変容させた大規模な試みだった。展示室で巨大な謎の構造物と出会った観客は、やがてそれが建物全体に貫入(かんにゅう)していることに気付く。谷口吉生(たにぐちよしお)氏の名建築への意表を突くアプローチ、驚くべき着想を形にする精緻な思考と実行力は高く評価される。 |
| 美術B | evala | 令和7年のevala氏は、緻密に制御された美術館空間とオープンな野外建築という対照的な場で、聴覚体験の可能性を大きく拡張した。ICCで開催された大規模個展「現われる場 消滅する像」では、広大な展示空間を「空間的作曲」によって変容させる新作インスタレーションを多数発表し、知覚の境界が融解する場をつくり出した。さらに「養老天命反転中(ようろうてんめいはんてんちゅう)！ Living Body Museum in Yoro」では、音、身体、美術が有機的に絡み合ったパフォーマンスで、場所の記憶と身体感覚を揺さぶる新たな風景を出現させた。 |
| 美術B | 永山 祐子 | 令和7年、永山祐子氏は、大阪・関西万博のウーマンズ パビリオンとパナソニックグループパビリオンを手掛け、初の単著と作品集を刊行した。注目すべきは、ウーマンズ パビリオンでは、様々な規制をクリアし、氏がデザイナー・アーキテクトを務めたドバイ万博日本館の組子(くみこ)ファサードのリユースを実現したこと。連続した万博で同じ部材が転用されるのは史上初だろう。しかも二つのパビリオンのファサードは、2027年国際園芸博覧会の異なる出展施設で再利用することも、万博の会期中に決定した。先駆的な循環型プロセスの試みとして高く評価できる。 |

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|--------|-------|---|
| メディア芸術 | 龍 幸伸 | 平成22年にデビューし数々の作品を描いてきた龍幸伸氏が、掲載誌を変え、令和3年に満を持して挑んだ作品が「ダンダダン」である。本作に至るまでの歩みは、マンガ業界においては「遅咲き」とも言えるものであった。しかし、その時間のもたらした成熟があったからこそ、オカルトとSF、青春と恋愛、恐怖と笑いを自在に融合させる破格の表現を可能にしたのであろう。物語の随所には「まさか」と思わせる展開が仕掛けられ、卓越した作画力と相まって、作品全体から圧倒的なエネルギーが迸(ほとばし)っている。氏の稀(まれ)なる才能が「ダンダダン」で解き放たれたことはマンガ界にとって僥倖(ぎょうこう)であり、今後の更なる進化が期待される。 |
| メディア芸術 | 花江 夏樹 | 世界的に盛り上がりを見せた『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』で主役・竈門炭治郎を熱演して作品を牽引(けんいん)した。炭治郎の頑張りに励まされた観客も多いだろう。さらにTVでも「ダンダダン」のメインキャラクターであるオカルンを筆頭に多数の作品に出演し、「劇場版 チェンソーマン レゼ篇」「ホウセンカ」では印象的な役柄で、主人公とは違う魅力も見せた。この充実したパフォーマンスと、その魅力が更に深まっていくことを期待して新人賞を贈る。 |
| 放送 | 新井 順子 | 新井順子氏がプロデューサーを務める「アンナチュラル」や「MIU404」は多くの支持を集めてきた。「海に眠るダイヤモンド」はその集大成である。昭和30年代の長崎県端島(はしま)と現代の東京。二つの時代を行き来しながら、それぞれの「場」に生きる人々の現実や心情を描いていく。戦争、原爆被爆、産業問題といった風化させてはならない事実を取り込み、“ネオ社会派”ともいえる秀作となった。 |
| 放送 | バカリズム | バカリズム氏はお笑い芸人として活躍する傍ら、近年脚本家として頭角を現し、テレビドラマ「架空OL日記」、「ブラッシュアップライフ」に続いて、「ホットスポット」で高い評価を得た。氏の脚本の特徴は、突飛な設定を用いながらも、リアルな日常会話を通して女性たちの友情や連帯を生き生きと描く点にある。独特な笑いのエッセンスが散りばめられた脚本は幅広い視聴者を惹(ひ)き付け、テレビドラマの活性化にも貢献しており、更なる活躍が期待される。 |
| 大衆芸能 | 翁家 和助 | どのような出番で高座に上がっても、きちんと存在感を示し、後に上がる落語家の邪魔をしない。わきまえた芸が芸人仲間から高い評価を得ている。国立劇場の太神楽研修生第1期生で、研修終了後は落語協会に所属し、寄席には欠かせない太神楽芸人として実績を積み上げた。芸に対する取組は先鋭的で、扇子をアクロバティックに組み込んだ芸を3年がかりで開発するなど、新時代の太神楽芸を常に模索し続けている。今後の飛躍も期待できる逸材である。 |
| 大衆芸能 | 玉川 太福 | 令和7年1月下席(しもせき)、新宿末廣亭で、玉川太福氏は浪曲師としては約60年ぶりにトリを務めた。連日大入り満員、正に祝祭の日々だった。ネタは多岐にわたり「陸奥間違(むつまちが)い」や一門のお家芸・天保水滸伝(てんぼうすいこでん)「笹川(ささがわ)の花会(はながい)」といった古典、自作の「地べたの二人」、同氏が生涯の仕事として取り組んでいる映画寅(とら)さんシリーズの「寅次郎夕焼け小焼け」などで観客をわしづかみにした。演芸史に刻まれる興行として高く評価したい。 |
| 芸術振興 | 牧原 依里 | 構成・演出を担当した舞台作品「黙るな 動け 呼吸しろ」では、ろう者と聴者の感覚や言語の違い(手話言語と音声言語)を背景とする社会課題が可視化され、社会と芸術を架橋するとともに、違いを超えて他者とつながる新たな芸術回路を創出し、芸術文化の公共性の在り方を更新した。また「手話のまち 東京国際ろう芸術祭2025」(総合ディレクター)では、これまでに構築した国内外のネットワークを活(い)かし、ろう者の文化や芸術表現を社会に開く活動を幅広く展開した。 |

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

| 部門 | 受賞者名 | 贈賞理由 |
|------|--------------|---|
| 芸術振興 | 山重 徹夫 | 中之条ビエンナーレは、群馬県中之条町で隔年開催される芸術祭で、令和7年に10回目を迎えた。立ち上げから20年を経て、あらゆる年齢層の地域住民に愛される芸術祭へと成長し、本展を契機に同地へ拠点を移す作家も現れるなど、地方都市におけるクリエイティブなコミュニティの形成に寄与した。総合ディレクターとして設立当初から本事業を牽引(けんいん)する山重徹夫氏は、作家自身の主体的な参画を促すような企画運営を通じて、地域社会と作家たちをつなぐ芸術祭の在り方を切り拓(ひら)いた。 |
| 評論 | ザヘラ・モハツラミプール | 日本語の「東洋」はオリエントの単純な訳語ではない。好奇心旺盛な近代日本の知性が「東洋」を拡大させていった。中国からインドへ。もっと先へ。日本と強くつながればそこは「東洋」。1929年、帝室(ていしつ)博物館(現東京国立博物館)はその範囲を「ペルシャの辺」にまで広げる。カギを握ったのは法隆寺の蔵(ぞう)する「四騎獅子狩文錦(しきししかりもんきん)」。探偵役は建築家の伊東忠太(いとうちゆうた)や歴史学者の黒板勝美(くろいたかつみ)。彼らが、遠すぎると思われていたイランを、ぐいぐい日本に寄せていく。その展開は上質な推理小説を思わせる。ザヘラ・モハツラミプール氏は「東洋」概念拡張史としての近代日本文化芸術史を今後もっと掘り下げてくれるだろう。 |